これからの理想的な図書館とは：特に米国の図書館見学をとおして

中山 栄美子*

岡山大学附属図書館

I. はじめに

ここ数年，社会的に図書館を取り巻く情勢の変化がことのほか激しい。図書館業務はコンピュータなしには考えられなくなり，国内の国公立大学においては合併・統廃合が目まぐるしく進んでいる。これから数年のあいだに，状況はさらに激変すると思われる。

個人的にこれまで国内 120 数館，国外（英米）30 数館あまりの図書館を見学してきた。2000 年 7 月に London で行われた ICML に参加し，米国における図書館の実際の様子を自分の目で確認したいと思っていた。そこで 2001 年 8 月に Boston で行われた IFLA への参加をきっかけとして，6 月と 8 月の 2 回にわけて米国の図書館見学を実行した。11 大学の図書館 19 館と，国立・公立の図書館 8 館あわせて 27 館（表 1）を見学した。

これらの訪問をとおしてあらたに感じるころがあったので，今回米国の図書館を中心にこれからの図書館とはどのような図書館なのかを考えてみたい。

II. 米国の事例

1. 医学関連系図書館

1) National Institute of Health Library (NIH Library)

NIH Library は，NIH の広大な敷地内の一番大きな建物の中にある。

閲覧室は 1 フロアで，最新雑誌の展示のほか 1 年分のみが未製本で置かれていた。副本を揃えた雑誌も Pro.N.A.S. ほか複数あった。また，新刊書も数多く揃えられていた。そして明るい窓際の椅子にゆったりと座って読めるような配置だった。最新の医学関連の図書・雑誌とも 1 室で見ることができるほか，パソコンも 10 数台置かれていた。なお，バックナンバーは当年分を除いて書庫に置かれ，古い年代のものはマイクロ化されていた。

出入口の付近に貸出カウンターが，中央には参考カウンターと職員が配置されていた。利用案内・データベースの案内も数多く揃えられていた。ここは NIH の職員が主に利用している。

なお，NIH Library と同一敷地内に NLM があり，1 F の閲覧室・医学史図書館ほか医学関連の展示等が広く一般公開されている。

2) Stanford University Lane Medical Library

Stanford 大学では，それぞれの図書館で入館時に利用許可申請して，すぐに入館証が発行され

*Emiko NAKAYAMA : 〒700-8530 岡山市津島中 3-1-1.

(2001 年 11 月 18 日 受理)

表 1. 訪問先図書館一覧 (ABC 順)

1	Boston Public Library	Central Library in Copley Square
2	Boston University	Frederick S. Pardee Management Library
3	Boston University	Mugar Memorial Library
4	Columbia University	Law Memorial Library
5	Drexel University	Hagerty Library
6	The Free Library of Philadelphia	Central Library
7	George Washington University	Himmelfarb Health Science Library
8	Harvard University	Countway Library of Medicine
9	Library of Congress	James Madison Memorial Building Digital Library
10	Library of Congress	James Madison Memorial Building Law Library
11	Library of Congress	Thomas Jefferson Building
12	Massachusetts Institute of Technology	Science Library
13	National Institute of Health	Library
14	National Library of Medicine	
15	New York Public Library	Central Library
16	Santa Clara University	Heafey Library
17	Santa Clara University	Orradre Library
18	Stanford University	Cecil H. Green Library
19	Stanford University	Lane Medical Library
20	Stanford University	Meyer Library
21	Thomas Jefferson University	Scott Memorial Library
22	University of California Berkeley	Main Library(Doe)
23	University of California Berkeley	Moffitt Library
24	University of California Los Angeles	Biomedical Library
25	University of California Los Angeles	Powell Library
26	University of Pennsylvania	Biddle Law Library
27	University of Pennsylvania	Biomedical Library

た。Lane Medical Library は広大な敷地内の一角にある医学部・病院と同じ建物の中にある。安らげる空間として、地下にはテーブルとイスが置かれた中庭(写真1)があって、その周りを取り囲んだ閲覧室から出られるようになっていた。

館内はコンパクトで、配置等の雰囲気は比較的日本と似ていた。また訪問時は夜中の12時まで開館しており、医師の姿も多く見られた。

この大学は High Wire で世界的に知られているように、電子資料に関しては特に力が入れている。ただし High Wire に関わっているのは図書館構成の中の別組織である。

ここでは、パソコン画面の印刷には寄付金を募るという形で対応していた。ほかの大学では1枚

いくらかに料金設定されているところもあった。

3) Harvard University Countway Library of Medicine

ここは今まで訪問見学した図書館すべての中で最も豪華な図書館であった。独立した6階建ての近代的な建物で、地下には書庫・展示室等があった。玄関を入ると、入館チェックの先にラウンジがあり、椅子・テーブル・照明そのほか書棚等の備品から空間自体まで優雅な雰囲気、ゆったりと雑誌に目をとおすことができる。各階に資料は豊富にあるが、さらにゆったりと読むスペースがふんだんに用意されていた。

日本からの寄贈雑誌も含めて、最新号は閲覧室の一角に展示、数年分は製本されて近くにあり、

写真 1. 地下の中庭を取り囲む閲覧室
(Stanford University Lane Medical Library)

古い年代のものは地下の書庫に置かれていた。

ブックエンドは曲がったりしない支えつきの強固なものが全館に使われていた。傷んだ図書はまったく見られなかった。

2. 医学関連以外の図書館

1) University of California Berkeley : Moffitt Library

米国で最初に訪問したこの図書館の書庫は驚嘆に値する。地下にある広大な書庫は見て回るだけでも1時間以上かかった。空調も完備されており、図書館特有のにおいはまったくなく、とても明るく清潔で快適である。書庫内の LEVEL C から B、D の階層への移動には、主階段のほかに上下階の様子が見通せるオープンな階段が2カ所あった。書庫内は、真ん中を広い通路が一本通った、各階ともほとんど同じ設計となっているので、わかりやすく利用しやすい。

書庫内の広い通路をはさんだ一方には手動の密集書架がまとめられていた。他方の固定書架も利用しやすいように書架そのものに引き出し式の簡易キャレルがついていて、その場で取り出して読めるようになっていた。そのほか書庫内に机、椅子、検索用パソコンが数多く配置されており、討議できるグループ研究室もあった。

また、サイズの特に大きな資料は利用しやすいように書架自体に配慮が見られ、低い書架の一段に一冊ずつ横に寝かせた状態に置かれ、かつ各階の同じ場所に配置されてあった。書庫内には案内図も数カ所にあるが、シンプルな設計であるので迷子にはならない。

大学の図書館が所蔵する数としては日本では考えられないくらいの膨大な蔵書を、快適に利用するために考えられるだけの配慮がされていた。

図書館1階フロアには貸出・参考・相互貸借のカウンターのほか、数十台ほど並べられたパソコンがあった。また、図書館入り口近くに身障者専用の広いスペースが確保されており、見たことのないタイプのパソコンが数台設置されていた。

なお、California 大学全体で立派な Digital Library を持ち、利用者教育等も積極的に行っている。

2) The Free Library of Philadelphia : Central Library

ここは分館あわせて55館という公共図書館の中央館である。巨大な中央図書館の中は、専門分野別に整備された閲覧室にわかれていて、各室に司書が数名いるカウンターがあった。入館してすぐのメインカウンターには、熟練した管理職の司書が交替で対応しており、速やかに質問に応じていた。

図書館内の各分野別の閲覧室へ通じる廊下・通路を利用して、さまざまな写真・ポスター等の展示が見られた。巨大な図書館の隅々まで有効活用されていた。

ここも電子化資料等を豊富に利用できる。そのほか、メールによる問い合わせに図書館として対応していた。日本ではしていないかとの質問を受けたが、少なくとも所属している図書館ではいまのところまだまだそのような状況にないことを伝えざるを得なかった。

写真2. Research Libraryの巨大な閲覧室
(Boston Public Library Bates Hall, Central Library in Copley Square)

写真3. 立派な木製参考カウンター
(Boston Public Library, Central Library in Copley Square)

3) Boston Public Library : Central Library in Copley Square

ここは1848年に創立された米国で最初の大きな市立図書館である。1895年に現在のCopley Squareに移っているが、そのときのコンセプトは“Palace for the People”である。Research Libraryと呼ばれている旧館の中庭には噴水もあり、1階の階段ホールには獅子が2頭鎮座していた。また閲覧室(写真2)・展示ホール・階段・廊下等天井が高く、いずれも立派なものであった。巨大な閲覧室の参考カウンター(写真3)はみごとな木製であった。他方、General Libraryと呼ばれている新館は、もっぱら貸出等に対応する蔵書を、渡り廊下に至るまで配置した、明るくて見

写真4. それぞれの書架の上につけられた照明器具
(Boston Public Library, Central Library in Copley Square)

通しの良い現代的な図書館であった。

600万冊を超す蔵書数で、雑誌類は約2万タイトル、新聞類も過去のものはマイクロ化されていた。館内の1室にマイクロリーダーが20台くらい置かれていた。展示室も大小数え切れないほどであった。Research Libraryの広い閲覧室では、図書が利用者によく見えるように、書架に直接照明器具が設置(写真4)されていた。

米国の図書館では書架そのものの上に照明器具が設置されているところが多く見られた。建物自体がとても大きく、由緒あるものが多いのだが、古い物も大切にしながら配慮が行き届いていて、図書館は利用者のためにあるという姿勢が感じられる。ここでもe-books 3,000冊ほか電子化資料を豊富に利用できる。

Ⅲ. 日本との共通点と相違点

まだ米国で見学した図書館は少なく、一概には言えないが、現時点でわかる範囲内で日米の図書館事情を比較してみる。

1. 人員・サービス

1) 人員削減

日本国内でも一部の大学図書館において、リス

トラが進んでいるが、米国でも大学図書館において、予算の削減とともに人員の削減が行われているところがあった。正式な職員（司書）、補助的な職員（司書）、パート、アルバイト等の構成が見られた。いくつかは、専門図書館であったが、総合図書館でも見受けられた。

2) 人員配置およびそのサービス

University of Pennsylvania Biddle Law Library は学部の建物の2階にあり、窓からは美しい庭の景色も存分に楽しめる優雅な設計の図書館であった。蔵書も整備されていた。なによりも頼りになる司書がいたことに安心感を覚えた。法学分野でのTopを競うような人材を輩出するところには、やはりそれなりの理由があった。整えられた資料とそれぞれの専門分野に詳しい有能な司書とゆったりとした空間が必要である。

大学によっては、専門分野別の閲覧室にそれぞれカウンターを設置し司書を配置しているところも数多くあった。このことは日本ではいままでのところあまり見られない。

また、今回訪問した図書館では入館者に対して図書館員のほうから声をかけてくる。これは公共図書館でも大学図書館でもあまり差はなかった。ほとんどの図書館において、受付カウンターで案内をしている職員はとても親切だった。

Drexel University Hagerty Library では、隣の大学の図書館に関する質問をした際にも、快く対応していただいた。

日本では、とかく利用者が声をかけない限り下を向いたまま対応しようとし、しない職員が多いが、米国では、管理職も含めて職員のほうから笑顔で声をかけてくる。はじめて訪問したときは本当にありがたいものである。また、気軽に声をかけてくれるので質問もしやすい。

そのほか米国の場合は、大学内に警察を持っているところが多い。学内警備等のほか図書館入り口またはそれぞれの建物の玄関受付に警官がいて

入館者のチェックを行うところが多かった。UCLA にはとても親切な警官がいて、岡山大学の約10倍という広大な敷地内で迷ったときに図書館への近道を案内してくれた。

ほかには、特に ILL 業務に関しては、米国では必要に応じていかに短時間で取り寄せるかということに力を注いでおり、かなりの人員が配置されていた。文献依頼をメールで受け付けているところも多かった。また、コピーの郵送以外にメールで依頼者に送付する対応をしているところもあった。

3) データベースサービス

LC, NIH, NLM 等は別格としても、あまりにも多くの種類のデータベースが当然のように各大学および公共図書館において提供されていた。Digital Library も現実の図書館と並立共存していて、予想以上に進んでいた。そしてそれぞれの地域全体でのコンソーシアムにも積極的であることなどが日本との大きな違いである。

また、利用者に対して、いかに使いやすく情報を提供するかについて、それぞれの図書館において行き届いた配慮がされている点にも、日米に大きな違いが見られた。

2. 図書館環境・利用環境等

なかでも実感したのは、桁外れに広大な敷地・巨大な図書館・膨大な蔵書・豊富なデータベース等規模の違いと、見事に整えられた図書館利用環境などである。以下にその一部を思いつくままに述べてみる。

1) パソコンの利用環境

特に University of California Berkeley Moffitt Library では、本人の責任において自由にパソコンを使わせていた。なかでも身障者用のさまざまな種類のパソコンが設置されていたが、これはほかには見られないものであった。まさに利用者が主体である。日本でもだれもが公平に利

用できる環境を整えることが望まれる。

また、ここの Main Library (Doe) では、キーボード用の引き出し式の台が好みの角度に変えられるようになっているなど、パソコンを無理なく快適に利用できるように配慮が見られた。

余談ではあるが、この Main Library (Doe) では、勉強をしてはいけない部屋、つまり勉強以外なら何をしてよい部屋というのがあった。日本では考えられないことである。

そのほかいくつかの図書館では、同じ建物のなかの図書館内外にパソコン学習の部屋が数多くあり、情報教育のためのスケジュール表も見られた。コンピュータ関係専門の数名のスタッフが常駐しているところもあった。情報教育のシステムもかなり日本より進んでいる。教官に対する教育を行っているところもあった。

パソコンのみが1フロアいっぱいには設置された図書館もあった。ここには職員の姿は見えなかった。

2) 閲覧室および書庫の環境

蔵書の閲覧環境はさまざまで、図書館の専門分野や規模によっても違いがある。

しかし、日本とは比較にならないほど膨大な蔵書数、情報収集あるいはレポート作成等のための快適な空間・机・椅子等がふんだんに用意され、サービス体制が整っていることが一番大きな違いであろう。

Harvard University Countway Medical Library など一部を除いて、今回ほとんどの大学の医学部では、近代的な学部・病院の建物の中に図書館が組み込まれていた。必ずしもこうでなければならない形態はないが、それぞれにできる範囲でより理想的と思われる図書館を作り出している。

3) 研究個室

ある大学の図書館では、上層階フロアの窓際に、書架を取り巻くような配置で研究個室が1フロア

あたり20室くらいあった。院生2名で共有できるスペースで、鍵つきの金網で仕切られ、利用者の安全に配慮がされていた。

あるいは、地下に机と椅子とやっと1人分のスペースの個室が、閲覧室の壁側に20~30室くらいある図書館もあった。ドアには小さな窓がついていて、外から個室の中が見えるなど、安全ということに注意が払われていた。

4) 電話と喫煙

ここ数年来、閲覧室内での携帯電話使用が問題になっているが、米国では図書館内に電話室のあるところが多く見られた。利用を禁止するだけでなく、特定の場所を提供しているのである。

喫煙に関しては、米国は特に厳しいこともあり建物内は完全に禁煙であった。さらに州によっては、建物内はもちろん建物から数百フィート以内禁煙のところも見られた。

5) 展示室

米国の大学では、図書館内に展示室を1室以上持つところが多かった。今回 Boston University Mugar Memorial Library では故キング牧師に関する展示をしており、彼が卒業生であることを知った。卒業生個人の生い立ち・業績の展示をしているなど、大学・卒業生に対して愛情と誇りを持っていることが感じられた。また多くの大学で卒業生の写真や銅像が数多く見られた。

IV. 結 論

これからの理想的な図書館、特に大学図書館は、専門分野別の図書館であること、あるべき蔵書の構成と配慮の行き届いた配置であること、必要なデータベース・電子資料等の利用が可能であること、有能な職員が確保されていること等、総合的に基本となる要素が整えられたうえで、さらに、利用者にとってより満足度の高い図書館・ゆとりのある図書館であると考ええる。

特に医学関連分野では、優秀な職員をいかに数多く図書館に確保できるかが重要である。そしてコンソーシアムをいかに効率よく利用者のために作りあげることができるかが重要な課題である。このことは大学のためでもある。

また、そのために必要な財源を大学運営側からいかに獲得できるかが大きな課題である。

日本では、ほとんどの大学において、館長・分館長を司書ではなく学部の教授が兼務しているが、米国では司書である。そのような違いも影響していると思われる。日本では、特に国立大学においては、ほとんどの場合、館長・部課長等は2年くらいで交替するということもあり、なかなか問題の解決もままならない。図書館内のさまざまなことがらに関しても、理解が得られにくいこともある。大学にもよるが、組織が大きくなればなるほどボトムアップもトップダウンも機能していないことが問題である。

特に分館の場合は、より財源の確保が難しく、データベースの選定・管理・人材の確保すらままならないことが多い。

それゆえに、各学部専門分野ごとの独立した専門図書館の運営が必要不可欠である。そして、それぞれの図書館が独立して対等に大学に貢献するために予算要求ができるようにならなければならない。

図書館は大学の中心たるに相応しいレベルでなければならない。そのためには図書館内外の意識改革も必要である。あとはそれぞれの図書館の特色を出して、その図書館がなければならないことを広くアピールすることが必要である。

V. おわりに

これからは世界的にも Internet 上の University が増えてくると考えられる。そして図書館が扱う資料も冊子体から二次資料データベース・電

子ジャーナル・e-book へと、さらに移行が進んでゆくのは時間の問題である。いかにこれらの資料・サービスを充実させ、利用に供することができるかという方向に図書館の主体が移ると考えるのは自明の理であろう。

すでに米国では現実の図書館と Digital Library が並行しているように見受けられた。あるいは、比重が変わっているように思われた。もちろんいままでの冊子体資料を粗末にするということではない。それどころか、いままで以上に大切にされている。しかし Digital Library はこれからの未来型世界規模での新しい図書館への第一歩といえるのではないだろうか。

確かに図書館によってはすでに博物館化しているところも見受けられた。情報収集教育への傾倒もこれから先どのくらいの比重が図書館に依存するかはそれぞれの大学・図書館の課題である。利用者よりも先を歩くことはこれからの時代たいへんな努力を要するのは想像に難くない。

救いは元気に活動していいたいくつかの図書館である。実際に訪問してみると、Homepage 上には現れることのない、人のあたたかいふれあいに接することができる。どんなに科学が進歩しても、便利さのみが追求されようとも、やはり人間にはあたたかさが必要である。

利用者にとって快適な図書館が、まぎれもなくこれからの理想的な図書館である。

最後に、9月11日の同時多発テロ以降、炭そ菌事件、アフガニスタンへの空爆等米国の平和は一瞬にして失われてしまいました。今回たいへん親切にしてくださいました各大学・国立公立図書館のみなさま、平川聡史先生に深く感謝するとともに、今回親切にいただいた米国在住のかたがた、そして世界中に一日もはやく平和が訪れますように心よりお祈りしたいと思います。